「下学上達」のすすめ

加藤　徹

『論語』は「突っ込みどころ」が多い。

例えば、学而篇の「無レ友二不レ如レ己者一。」（己に如かざる者を友とする無かれ）という教えも、実は不思議である。もし学校のクラスの全員が「自分より劣った人とは、友だちになるな」というプロトコルを実行したら、どうなるか。

「君は、ぼくよりすぐれている。友だちになってくれ」

「ごめんなさい。友だちにはなれない。あなたは、私には及ばないから」

この不等式の連続で、クラス全員がひとりぼっちになってしまう。まさにパラドックスだ。歴代の学者による『論語』の注を読むと、古来、多くの人々がこの矛盾に頭を悩ませてきたことがわかる。

筆者が『論語』の漢文に初めて触れたのは中学生のときだったが、当時「無レ友二不レ如レ己者一。」という言葉に違和感を覚えた。へそまがりな生徒は、筆者だけではないようだ。最近出た影山輝國著『『論語』と孔子の生涯』を読むと、著者の高校時代の思い出として、数学が得意な同級生が漢文の授業中に「無レ友二不レ如レ己者一。」の矛盾を指摘し、教師が立ち往生する話が書いてあった。その生徒はさらに、数学的思考法による見事な解決法を示し、同級生の拍手喝采を浴びたという。その解答は、ここでは書かないの

がマナーであろう。

「無レ友二不レ如レ己者一。」という原則を守りつつ全員が友だちになる方法は、実は複数ある。

『論語』憲問篇の「下学上達」という言葉は、「身近な経験や知見から出発して、深く考えれば、真理の高みに達することができる」意だと思う。ふつうの中学生や高校生でも、子どものころ読んだ絵本とか、漫画やアニメの名言とか、卑近な知見をヒントにして『論語』の謎を考えることができる。

「無レ友二不レ如レ己者一。」のパラドックスを解くヒントは、日本の昔話「ねずみの婿とり」（明の『応諧録』に同様の寓話がある）のオチだとか、漫画の名言「強いとは〝弱さ〟を知ること。弱さとは〝臆病〟であること。臆病とは〝大事なものを持っている〟ということ。〝大事なものを持っている〟ということは、〝強い〟ということ。」（浦沢直樹『20世紀少年』第四巻）の中にもある。子どもたちは、絵本やアニメや電子ゲームを通じて、世の中の「すぐれている人」の順番は実は「無限ループ」であることに気づいている。それをヒントに、自分の具体的なクラスメートの顔を思い浮かべ、自分なりの解答を出すことができる。

実際、若い学生にこの問題を考えさせると、ときどき見事な答えが返ってきて「後生、畏るべし」の感を深くする。これから「無レ友二不レ如レ己者一。」の問題を考える人の楽しみをこわさぬため、解答例はあえて書かない。

加藤　徹（かとう　とおる）
一九六三年（昭和三八）――。中国文学・京劇専攻。東京都生まれ。
主な著書――『漢文力』（中央公論新社）『貝と羊の中国人』（新潮社）『絵で読む漢文』（朝日出版社）『白文攻略　漢文法ひとり学び』（白水社）など。

●教科書収録教材
「漢文のすすめ――未来を考えるヒント」
『新編国語総合　改訂版』［国総347］

現代に生きる『論語』

加地伸行（かじのぶゆき）

遠いその昔、私は大学院学生であったが、教員採用試験に合格し、夜は大阪府立高津高校定時制の教諭として勤務することになり、国語担当の新人教員のスタートを切った。

そして一週間後、授業方法を大きく変えることとなった。生徒は、昼間は働き、定時制高校下校後、おそらく午後十時ごろの帰宅であろうから、すぐ就寝。もちろん、朝は早い。全日制高校生のような〈予習・復習の時間〉などはない。となると、予習・復習の必要がない授業をしなくてはならない、いや、すべきであると思い、そういう授業方式に切り替えたのであった。

それはどのようにするのか。答は決まっている。目的は、一授業時間（定時制は四十五分）内に、一つ或いは二つの重要なことを〈完全に〉理解させ、予習・復習の必要をなくすことだった。

そのためには、教材の入念な準備が最も大切であることは言うまでもないが、もう一つ根本的に重要なことがあった。それは、生徒を楽しませることである。

語弊を許されれば、あえて言おう、教員は〈芸人となり、ライブショウをする〉ことだ。

と言っても、お笑いタレントになれというような意味ではない。例えば、漢文の「鴻門の会」などは、講談調でいい。細かな語法や語義などどうでもいい、スリルとサスペンスとを混えて話す途中、ときどき

漢文の語句を拾ってぶつける、その語句をみなで唱和する、生徒に役を振って国語でやりとりをさせる……という具合である。

古文の『万葉集』が教材のときは、例えば古代王朝のドラマを語る。大津皇子（おおつのみこ）の悲劇から、二上山の彼の墓の意味、そして二上山を挟んで奈良・大阪を結ぶ竹（武）内街道――折口信夫の名歌「大和（やまと）より蒔（まき）売りに来（こ）し悲し子の帰りは雨か竹内峠」に至る。大阪の子（こ）なら、竹内峠の場所はみな知っている。

現代文が教材のときは、例えば東北アジアと欧米との比較文化、同じ東北アジアでも日本と中国との相違、同じ日本でも関東と関西との相違、を私は語り続けた。『枕草子』のとき、関東アクセントと関西アクセントの違いで読ませた。例えば「春はあけぼの」の「春」字。「ハル」を関東では「ハ」にアクセントを置き、関西では「ル」に置く。そうした相違から「ハル・ナツ・アキ・フユ」すべて東と西とでは逆のアクセントであることを実感させ、どちらのアクセントで読んでも通じるが、英語ではそうはならないという話に及ぶ。

教員の任務、教育の目的はただ一つ〈生徒のモチベーションを引き出し高める〉こと、それに尽きる、と私は思っている。

とすれば、『論語』は絶好の教材ではないか。『論語』ほどドラマティックな物語はまたとない。主人公孔子の苦難の生涯、孔子をめぐる弟子たちのさまざまな在りかた――私が脚本家ならたちどころに書き尽すことであろう。

現在、ＢＳフジテレビＫＩＤＳ（キッズ）のホームページからインターネットの〈論語指導士講座〉を見ることができる。もちろん無料。その全二十四回の講義をすべて私が担当している。目的は、『論語』を教えることができる人を養成することである。もちろん、古典、さらには漢文担当の全教員に見ていただきたいという気持ちで始めた。

その最終回の講義終盤において、あえて『論語』の一文を取りあげ、ある一場面について説明した。それは、今日と異なり、かつては不治の病とされたハンセン病の患者となり、だれにも会おうとしなかった

伯牛という弟子の家を孔子が訪れたときのこと。孔子にも会おうとしなかった伯牛に対し、孔子は窓から手を入れ、伯牛の手を握る劇的シーンである。この孔子と弟子との姿が『論語』の本質を静かに物語っている。

また、同じ最終回講義において、ノーベル賞受賞の山中伸弥氏と私との対談（二十数分）を放映している。遺伝子が生物体を乗り換え乗り換えして生き続けているという最新科学生命論と、祖先以来の生命の連続を柱とする儒教理論との両論が、奇しくも一致しているという、劇的な〈最新生命科学理論と古典儒教理論との共通真理〉を二人で語った対談である。これこそ、過去を貫き、現代に生きる『論語』でなくてなんであろうか。まさに温故知新――古きを温めて、新しきを知ることそのものである。

私の願いは、実社会から身を引かれた高齢の方々に、相手が成年であれ、少年・幼児であれ、御自宅のリビングルームを使って塾を開き、『論語』を教えていただきたい、というものである。

八十歳――老齢の私には、もう欲も得もない。若い生徒諸君が虚心に『論語』に触れ、そこから何かを得てほしいという切なる願いのみであり、それをまずは教育現場に期待いたしたい。

加地伸行（かじ　のぶゆき）
一九三六（昭和一一）――。中国哲学専攻。大阪市生まれ。
主な著書――加地伸行著作集〔学術専門書〕全三巻（研文出版）『儒教とは何か』（中央公論新社）『沈黙の宗教――儒教』（筑摩書房）『漢文法基礎』『論語のこころ』（講談社）など。

●教科書収録教材
『「論語」再説』『国語総合 古典編 改訂版』［国総345］
『精選国語総合 新訂版』［国総346］

●特集＝『論語』をもっと活用しよう

『論語』ではぐくむ思考力と感性

塚田勝郎（つかだかつろう）
（筑波大学附属高等学校・教科書編集委員）

1　はじめに

先日、高等学校の教員の集まりで、国語の授業について報告する機会がありました。「十社から発行されている「国語総合」や「古典A」「古典B」の教科書全点で、『論語』が教材化されている」と述べると、会場からは「それほど『論語』が重視されているとは知らなかった」という声が聞こえました。さらによく聞いてみると、国語科以外の先生の中には、「『論語』の授業の主目的は、孔子の教えを生徒に伝えることだ」と錯覚している方があるようなのです。

これと似たような現象を、教育実習生の「学習指導計画」の中に発見することがあります。教育実習で『論語』を扱うと、多くの実習生は「『論語』の学習を通じて、生徒の人間性を育てる。」と単元目標に記します。また、ネット上に公開されている各地の高等学校のシラバスの中にも、「『論語』により修養の大切さを伝える。」などの文言が散見されます。『論語』が東アジアの思想界を代表する最高の書であることは、疑い得ない事実です。しかし、絶対の書ではないはずです。先に触れた他教科の先生たちの錯覚や、『論語』の「学習指導計画」やシラバスに見られる困った文言は、いずれも「高等学校の漢文の授業では、孔子の思想そのものを、無批判に教える」という誤解に基づいています。

では、『論語』の授業では、何を目標にすればよいのでしょうか。大修館書店『国語総合　改訂版』に採られている『論語』の文章を例に取りながら考えてみます。

2　対比的なものの見方や考え方を知る

『論語』に記されている孔子の発言には、対句が多く用いられています。筆も紙もなく、記録が困難だった時代には、記憶による伝達が主でした。『論語』という書物も、門人たちが記憶をリレーし、それを集成してできたものとされています。孔子が対句を意図的に用いたのか、門人たちが孔子の発言を対句的に修正して記憶したのか、さだかではありませ

んが、孔子の言葉を保存するにあたって、覚えやすく、印象に残る対句の果たした役割は大きいはずです。具体例をあげてみましょう。

A　子曰、由、誨二女知レ之乎。
　　知レ之為レ知レ之、
　　不レ知為レ不レ知。
　　是知也。（為政）

B　子曰、
　　学而不レ思、則罔。
　　思而不レ学、則殆。（為政）

C　子曰、
　　其身正、不レ令而行、
　　其身不レ正、雖レ令不レ従。（子路）

D　子曰、
　　道レ之以レ政、斉レ之以レ刑、民免而無レ恥。
　　道レ之以レ徳、斉レ之以レ礼、有レ恥且格。（為政）

Aは、「知レ之為レ知レ之」と述べるだけでも通じます。しかし、「不レ知為レ不レ知」と丁寧に添えることで、ちがいがより鮮明になります。対句の効果といっていいでしょう。なお瑣末なことですが、「知レ之為レ知レ之」の二つの「之」が指示語ではないことは、対句構造であることから容易に説明できます。

B・C・Dは、条件や前提を変えると、まったくちがった結果が生じることを述べる対句です。

Bは、「学（学習）」と「思（思索）」の位置を入れ換えることで、両者のバランスが重要であることを巧みに説いています。

Cでは、為政者自身が「正」である場合と「不正」である場合とでは、民の恥の意識のあり方が正反対になることが、明確に伝わります。

Dでも、「政（政令や法律）」や「刑（刑罰）」による法治主義に対して、「徳（為政者の仁徳）」や「礼（集団生活のルール）」による徳治主義の優位を説くことに成功しています。

ものを考える時には、全体を俯瞰しながら抽象的に思考することも重要ですが、具体的な事実に即して、類似のものや相反するものを並べ、比較しながら考察する過程も欠かせません。対句の構造や効果を確認することで、そのような思考法を学ぶことが可能になります。

3　孔子の思想の現代性に気づく

先にも述べたように、『論語』の授業の目的は、孔子の教えや儒家の思想をそのまま伝えることではありません。また逆に、『論語』を全面的に否定することでもありません。先入観を持たずに『論語』の文章と向き合い、生徒が共感でき

る点と納得できない点を拾い上げることから授業を始めることも可能でしょう。

為政者のあるべき姿を述べた次の文章は、政治不信の現代に十分に通用します。

子曰、「為レ政以レ徳、譬如下北辰居二其所一、而衆星共上之。」（為政）

また、「子貢政を問ふ。」（顔淵）の文章で、孔子が政治の優先課題は「信（人民に信義の心を持たせること）・食（生活の安定）・兵（軍備の削減）」の順であるとしたことも、現代の政治状況と重ねて興味深く読めます。孔子の思想の現代性を考えることは、『論語』学習の眼目の一つです。

4　孔子の人間性に触れる

孔子を完全無欠の人と考えたり、聖人扱いしたりすることは、『論語』の正しい読みにはつながりません。孔子といえども人の子であり、悩みや憂いを抱えていたことを知ることで、生徒は孔子を身近な存在に感じるはずです。

例を示しましょう。『論語』巻頭の文章の一部です。

人不レ知而不レ慍、不二亦君子一乎。（学而）

孔子は不遇だった時代に、世の人が自分の学識や能力を正しく評価してくれないと、心中に不平不満を持ったことがあったのでしょう。そのような実体験があったればこそ、「なんとまあ君子らしい態度ではないか。」という感慨は共感を得るのです。

また、次のように過去の経験を率直に語る点も、孔子の人間的な魅力です。

子曰、「吾嘗終日不レ食、終夜不レ寝、以テ思。無レ益。不レ如レ学也。」（衛霊公）

孔子の人となりの一端に触れることで、生徒と孔子、生徒と『論語』との距離は一気に縮まることでしょう。

5　考える「種」を蒔く

「後生畏るべし。」という孔子の言葉があります。高校生の潜在的な能力や将来の可能性には、敬意を払わなければなりません。しかし残念ながら、彼らはまだ経験や知識が十分ではありません。わずか十五、六年の経験と知識だけによる判断には、危険がつきまといます。たとえば「葉公孔子に語りて曰はく、……。」（子路）の文章を学習した後で、父の罪状を証言することと、父の犯した罪を隠すこととを比較して、どちらが正直かを議論したとしましょう。高校生には二千五百年前の社会に関する知識がありませんから、どんな

に懸命に議論しても、結論は出ず、不毛に終わってしまいます。このような時には、教科書の参考文が有益です。「孔子のころは、まだ各種共同体が現実に機能していた時代である。」に始まる加地伸行『「論語」再説』の一節を参考にすることで、考える材料が与えられ、議論が深まります。「教科書の参考文の扱い方がわからない」という現場の先生の悩みを耳にしますが、参考文は教科書本文の理解を深める上で、大事なツールです。難しく考えず、一読すればよいのです。それだけで教材の理解度は確実に向上します。

孔子が自らの精神史を述べた「子曰はく、『吾十有五にして学に志す。…』」も、高校生には実感しにくい文章でしょう。表面的な理解はできても、将来の自分が至るかもしれない境地に思いを及ぼすことは困難です。「今はわからないかもしれないが、将来必ず『ああ、こういうことか。』と実感できる時が来る。その時に備えて、孔子の言葉を何度も読み、心に刻んでおこう。」と教師が述べることによって、生徒の漢文への親しみの度合いも増すにちがいありません。国語の他の分野や教材にも言えることですが、『論語』も今全部を理解する必要はないのです。教師自身がそのような観点に立ち、ゆったりと余裕のある授業を展開することが求められます。

『論語』を道徳や修身、修養の書として尊崇の対象にするのではなく、孔子の考え方や感じ方を知り、高校生の思考力や感性を養う材料として生かしたいものです。

6　おわりに

授業で『論語』を扱うにあたっては、教科書に採られている部分だけでなく、『論語』全体を視野に置いて教材研究を行ってほしいと強く願います。しかし、『論語』全編を通読して授業に臨むことは、ほとんど不可能です。注解書のほかに、『論語』に関する評論を一冊読んでみることをお薦めします。新しいものでは、次の三冊を推薦します。

井波律子『論語入門』（二〇一二年、岩波新書）
小倉紀蔵『新しい論語』（二〇一三年、ちくま新書）
加地伸行『論語のこころ』（二〇一五年、講談社学術文庫）

高橋和巳のように、『論語』に腹を立て、壁に投げつける体験は無理としても、教師自身が『論語』に対する先入観や浅薄な既成概念を打ち払い、真摯な気持ちで教壇に立つことを望みます。

・思想単元もリニューアル！

『国語総合 改訂版古典編』［国総345］
『精選国語総合 新訂版』［国総346］

教室のお悩み解決！
『論語』の指導Q＆A その1

松家 滋
（都立国際高等学校）

■『論語』はお説教ください？

Q 『論語』を教えていると、どうしてもお説教くさくなってしまって、自分でもいやになります。

A あの書き下しにした訓読文の調子がそういう感じをもたらすということがありますね。教科書に取り上げられている章がそう思わせるような箇所であることが多いことも一因でしょう。でも教える側について言えば、孔子を必要以上に「聖人」として考えすぎてはいないでしょうか。『論語』を素直に読んでいけば、それはかえって孔子の姿を歪めてしまっていることが分かると思います。『論語』述而編の中で孔子はこう言っています。

子曰はく、「聖と仁とのごときは、則ち吾豈に敢へてせんや。抑之を為して厭はず、人を誨へて倦まず、則ち謂ふべきのみ。」と。公西華曰はく、「正に唯だ弟子学ぶこと能はざるなり。」と。

孔子は自身を「聖人とも仁者とも思っていない、ただ聖人や仁者を理想として厭かず学び、倦まず人に教えているだけだ」と言っているのですね。弟子の公西華は「それが私たちにはまねができないのです」と応えていますが。これを孔子の謙遜と考える人もいるのですが、そのまま受け取っていいと思います。また、同じ述而編にはこうもあります。

子曰はく、「我は生まれながらにして之を知る者に非ず。古を好み、敏にして以て之を求むる者なり」。

自身も学び続けること、そして弟子たちを教え続けること、これが孔子自身のいう自分の姿だったのですね。

Q でもそれはやはりお説教ということになりませんか。

A なるほど。では少し具体的に孔子がどのように弟子に接したかを見てみましょう。これは先進編の中にある話。

子路問ふ、「聞くがままに斯ち諸を行はんか。」と。子曰はく、「父兄の在す有り、如之何ぞ其れ聞くがままに斯ち之を行はん。」と。冉有問ふ、「聞くがままに斯ち諸を行はんか。」と。子曰はく、「聞くがままに斯ち之を行へ。」と。

「よいことを聞いたらそれをすぐに実行すべきでしょうか」という問いに、片や「父兄がいるのにその意見も聞かずに軽々しく行動してはいけない」と言い、一方では「すぐに行うべきだ」と応える。言うことが正反対ですね。この問答を聞いていた他の弟子が、変だと思って孔子に尋ねます。孔子は「子路は人を差し置いてでもやろうとするから、それを抑えたのだ、冉有は引っ込み思案だから、積極的に出ろと言ったのだよ」と言います。孔子はひとりひとりの弟子の性格をしっかりと把握し、そのうえで教えてゆくのですね。これは単純なお説教とは違うのではないでしょうか。読む方も、どういうときに、誰に向かって言われた言葉なのかをふまえる必要がありま

すね。

Q　孔子の性格をよく表している章はありますか。

A　これはたくさんあります。ほとんどの章からそれは分かりますよ。ここでは一つだけ、やはり述而編から。

子は温にして厲しく、威にして猛ならず、恭しくして安し。

解説の必要もないでしょうね。ある場合には、孔子は弟子に対して容赦なく怒ることもあります。いま例に出した冉有、この人が魯の国の家老の代官になって人民から不正に税を搾り取ることをしたとき。「あいつはもう我々の仲間ではない。諸君、あいつを攻めていいぞ」と他の弟子に言っています。これは破門だということですね。さらに有名なのは昼寝をして散々に罵られた宰我。この人に対して孔子はいくつかの章で憎悪さえもはっきりと表しています。ただふつうはその弟子の良い面を認めたうえでの叱責が多いのはもちろんです。

■『論語』に生徒は興味をもつのか

Q　『論語』は短い章なので教えづらいのです。ある程度まとまったストーリーがある方が生徒も興味を持つのですが。

A　そうですね。ただ短いからかえって想像力を働かせていくことができるということはないでしょうか。そのことばの背景にあるものを生徒とあれこれと考えるのも楽しい。それとこんな例もあります。

子貢曰はく、「我人の諸を我に加へんことを欲せざるは、吾亦た諸を人に加ふること無からんと欲す。」と。子曰はく、「賜や、爾の及ぶ所に非ざるなり。」と。

（公冶長編）

「己の欲せざる所、人に施すこと勿かれ」ということばは『論語』のなかでもかなり有名ですね。これは顔淵編には仲弓という弟子が仁について聞いたときの答えとして出てくるのですが、実はもう一箇所、衛霊公編にも出てくるのです。「ひとことだけで一生おこなっていける、そういうことばはありますか。」という弟子に、孔子は「其れ恕か。」と言い、この同じことばを続けます。この弟子が他ならぬ子貢（賜は、名）なのです。先生にそう言われて、ではそうしようと決意表明をすると、孔子は「それはお前にできることではない。」と言う。考えてみるとこれはかなりひどいですよね。孔子はなぜそんなことを言うのでしょう。そういうことをみんなで考えてみるのもおもしろいと思いませんか。

Q　結局『論語』をかなり読まなくてはいけないのですね。

A　時間があれば全文をと言いたいところですが、ただ現在の学校の状況ではそれはなかなか難しいでしょう。文庫本の『論語』には索引が付いていると思います。それを使って、例えばひとりの弟子を選んで、その人が出てくる章をすべて読んでみるというのはどうでしょう。これをやるなら、子路が断然おすすめです。この人は中島敦の『弟子』という小説の主人公でもあるのでご存じだと思います。登場回数も最も多い。孔子へ諫言もするし、からかわれもするし。かなりの魅力のある人です。それこそ物語性もあると思います。

●孔子と弟子の人物像については
⬇26ページ「『論語』が断然おもしろくなる！　女子のための人物紹介」
●『論語』を読むには
⬇29ページ「目的別『論語』を知るためのブックガイド」
●さらなる疑問には
⬇24ページ「『論語』の指導Q&A　その2」

【授業実践】『論語』でつちかう漢文脈
――漢文シャワーの試み

渡辺恭子（わたなべきょうこ）
（東京都立戸山高等学校）

私は、今までの教師経験の中で、「勉強にあまり興味を持たない生徒たち」と、「いわゆる進学校と呼ばれる高校に通う生徒たち」と半分ずつくらいかかわってきました。そのどちらの生徒たちにもいえることは、入門期の指導によって、漢文の好き嫌いがある程度決まってくるということです。中でも、最初の段階である「つかみ」の指導が重要なのですが、その方法としては、「素読」が一番効果的であることを実感しています。「つかみ」としての「素読」は、入門期に限らず、その内容次第で、どの教材でも、どの学年でも有効な指導となりえるのです。

今の高校生たちは、日常生活の中で、「漢文」はもちろん、「漢文脈の文章」に触れることもそう多くはありません。このような生徒たちが「漢文」と親しくなるためには、「理解する前に、まず身体で覚えること」が一番です。江戸時代に、寺子屋で子どもたちが楽しそうに「漢文」を素読したように、授業の始めに大きな声で「漢文」を読む。「読む」という行為それだけで、漢文好きの生徒が増えるように感じます。

1　漢文シャワー

かれこれ十年以上前から、毎時間、漢文の授業の最初十分位ですが、生徒たちに大きな声で漢文を読ませています。それ以前も、「声に出して漢文を読む」ことの重要さは感じていましたが、同時に、大切な授業時間を毎回「読み」に当ててしまうことに、一抹の不安もありました。そんな折、「朗唱」の大きな効用について、『朗唱　漢詩漢文』（全国漢文教育学会編）の中で石川忠久先生や安居聰子先生が述べておられるのを拝見して、自分の考えは間違っていなかったと自信を持つことができました。また、時を同じくして、齋藤孝氏の『声に出して読みたい日本語』（草思社）がブームとなり、世間でも「読む」ことの重要性が叫ばれるようになりました。この機に乗じて、私も授業に「漢文シャワー」を取り入れることに決めたのです。早速試してみたところ、生徒たちが本当に嬉しそうに読むのに驚きました。更に回数を重ねると、漢文が身体に馴染んで、身が引き締まるような美しい「音読」になるのです。同時に生徒の口から「漢文が好き」とい

う言葉も出るようになりました。

「漢文シャワー」で読ませる素材は、学年や目的によって様々です。一年生には、主に教科書の教材を使います。二年生には、それに句法・語法を意識した短文を加えたりします。今年度は、副教材『明説漢文』（尚文出版）の句法例文を、一年かけて全文「漢文シャワー」として授業の始めに「素読」しました。三年生には、受験を意識した「句法」の「漢文シャワー」例文を作り、読ませています。その中には、「花子、太郎に愛せらる。（受身）」、「高校は戸山高校に若くは莫し。（最上級）」のように私が作った例文もあります。これを毎回読ませ、実際にその句法・語法を説明する際には、馴染みのあるこの例文を使うようにしています。そうすると、理解も早く効果的なのです。しかし、研究授業でこのプリントを使った際に、石川忠久先生から「漢文を読むことは大変良い。しかし、生徒が何度も口にする漢文は、やはり古来からある美しい漢文がよいのではないか。」というご助言をいただきました。なるほど、その通りだと思い、まずは『論語』でシャワープリントを作ることを決めました。

2　『論語』の漢文シャワー

素材を『論語』に決めたのは、日本に早くから伝えられた書物であること。そして、孔子の教えには一生涯学ぶことが多く、今は分からなくても、覚えていればいつか人生のよすがとなることもあるだろうと考えたからです。また、鈴木修次氏は、その著書『論語と孔子』の中で次のように述べています。「当時の門人たちは、孔子から与えられた言葉を記録するという習慣はなく、記憶で覚え、忘れないように何度か口ずさみ、身体で覚えさせた。ゆえに孔子は、つねに自分のレトリックに、格別の工夫をするところがあった。そのレトリックの工夫は、一様ではないが、口ずさみやすくする、覚えやすくする、少ない音数でことばをきわめてゆく、というところにまず第一の工夫があったと考えられる。」この点からも、『論語』は、「漢文シャワー」教材としてふさわしいと思いました。

実際に、どのように作ったかですが、一枚のプリントに「本文（白文）」「書き下し文」「口語訳」を書き、一回に三章載せることを基本としました。口語訳は、金谷治氏『論語』（岩波文庫）を使用。［参考］として、『論語物語』の著者である下村湖人の『［現代訳］論語』（ＰＨＰ研究所）を添えました。それは、原文への関心や下村湖人の『論語物語』への関心、さらには中島敦の『弟子』へ繋がればという思いがあったからです。章句を載せる順序としては、初年度は、『論語』の順序通り「学而」から作りました（次ページ資料）。

「漢文シャワー」を体験した生徒の感想としては、次のようなものがあります。

漢文シャワー①　「論語」学而第一

※「書き下し文」・「口語訳」は、金谷治『論語』（岩波文庫）を使用した。「書き下し文」については、教科書・副読本の読みに従って渡辺が改めた部分もある。※「参考」として、下村湖人（1884～1955）『現代訳論語』を示した。

1　子曰、学而時習之、不亦説乎。有朋自遠方来、不亦楽乎。人不知而不慍、不亦君子乎。

子曰はく、「学びて時に之を習ふ、亦た説ばしからずや。朋の遠方より来たる有り、亦た楽しからずや。人知らずして慍みず、亦た君子ならずや。」と。

〔口語訳〕先生がいわれた。「学んでは、適当な時期におさらいする、いかにも心嬉しいことだね。（そのうえ）理解が深まって向上していくのだから。だれか友だちが遠いところからもたずねて来る、いかにも楽しいことだね。（同じ道について語りあえるから。）人が分かってくれなくても気にかけない、いかにも君子だね。（凡人にはできないことだから。）」

〔参考〕先師がいわれた。「聖賢の道を学び、あらゆる機会に思索体験をつんで、それを自分の血肉とする。なんと生き甲斐のある生活だろう。こうして道に精進しているうちには、求道の同志が自分のことを伝えきいて、はるばると訪ねて来てくれることもあるだろうが、そうなったら、なんと人生は楽しいことだろう。だが、むろん、名聞が大事なのではない。ひたすらに道を求める人なら、かりに自分の存在が全然社会に認められなくとも、それは少しも不安の種になることではない。そして、それほどに心が道そのものに落ちついてこそ、真に君子の名に値するのではあるまいか。」と。

2　有子曰、其為人也、孝悌而好犯上者鮮矣。不好犯上而好作乱者、未之有也。君子務本。本立而道生。孝悌也者、其為仁之本与。

有子曰はく、「その人となりや、孝・悌にして上を犯すことを好む者は、鮮なし。上を犯すことを好まずして乱を作すことを好む者は、未だ之れ有らざるなり。君子は本を務む。本立ちて道生ず。孝悌なる者は其れ仁の本たるか。」と。

〔口語訳〕有子がいわれた。「その人がらが孝行従順でありながら、目上にさからうことを好むようなものは、ほとんど無いのに、目上にさからうことを好まないのに、乱れを起こすことを好むものは、めったに無い。君子は根本のことに努力する。根本が定まってはじめて（進むべき）道もはっきりする。孝と悌ということこそ、仁徳の根本であろう。」

〔参考〕有先生がいわれた。「家庭において、親には孝行であり、兄には従順であるような人物が、世間に出て長上に対して逆であったためしはめったにない。乱を起こすことを好む人が、好んで社会国家の秩序をみだし、乱をおこしたいというためしは絶対にないことである。それは、君子は何ごとにも根本を大切にし、まずそこに全精力を傾倒して来たのだから、根本さえ把握すると、道はおのずからにしてひらけて行くものだからである。君子が到達した仁という至上の徳も、おそらく孝弟というような家庭道徳の忠実な実践にその根本があったのではあるまいか。」と。

3　子曰、巧言令色、鮮矣仁。

子曰はく、「巧言令色、鮮なし仁。」と。

〔口語訳〕先生がいわれた。「ことばと上手の顔上しでは、ほとんど無いものだよ、仁の徳は。」

〔参考〕先師がいわれた。「巧みな言葉、媚びるような表情、そうした技巧には、仁の徳がうすい。」と。

プリント　漢文シャワー①

・「漢文シャワー」でこれからやるぞという気持ちになれた。
・授業の初めにやる「漢文シャワー」は良かったと思います。簡単に音読できるようになったと思います。先生の軽快な声が眠ざを吹き飛ばしたと思います。
・先生が、授業の度に「漢文シャワー」をやってくれていたのでテスト勉強をする時になぜか全部覚えていてびっくりした。良い習慣だと思うので、今後も続けて欲しいです。
・とても楽しみにしています。漢文では「身体で覚える」ということをやっていますが、本当に頭にスンナリと入って来るので、良い方法だと思います。
・漢文をみんなで音読したりして声を出すので、とても楽しい授業だと思っています。『論語』は良いことをいっていると思いました。
・リズムで覚えさせられたものは、全てテスト中でも鮮明に蘇り良かった。あの方法の覚え方は素晴らしいと思う。

3　まとめ

漢文は、漢字ばかり並んでいて難しそうだという先入観から、その含蓄ある内容に触れないうちに、苦手意識を持つ生徒も多いようです。特に『論語』は、年を経てはじめて、「こういうことだったのか！」と納得できるものも多くあります。ですから、高校時代には、漢文に興味を持たせる「つかみ」の指導としての「漢文シャワー」が特に効果的です。そして、さらに効果を高めるのは、教師自身の情熱だと思います。教師自身が漢文に対する興味関心を持ち、「漢文は面白い」という気持ちで授業に臨むことが、生徒を漢文好きにする一番のコツだと実感しています。

【授業実践】『論語』のアクティブ・ラーニング
――思考を図解する

大村勅夫（おおむらときお）
（北海道旭川東高等学校）

はじめに

二〇一五年度「国語総合」教科書において、『論語』や孔子の思想を扱っていないものはほとんどない。とはいえ、『論語』を授業で扱う難しさはいくつかあるだろう。

一つに、『論語』は非常に魅力的であり、その内容や思想を教師が語りたくなってしまうことだ。すなわち、〝語る〟授業をしたくなってしまうことだ。とはいえ、内容教授となるだけでは、国語科の授業としては不十分なのは言うまでもない。繰り返しになるが、もちろん、『論語』は非常に素晴らしい書物であり、生きていく指針となるにもまったく不思議のないものである。ただし、教科国語は、教材となるテキストそれぞれの内容教授が主目的ではない。『論語』を教材として用いることで「読むこと」などの力をつけることが主目的となる。『論語』をどう使うか。これが難しい。

もう一つに、解釈が非常に難しいことがある。前述した〝語りたくなる心情〟の一因でもあるだろう。テキストそのものだけで理解することの困難さがある。例えば、人口に膾炙している「子曰吾十有五而志于学」の通釈を、『新釈漢文体系』（明治書院、一九六〇）では「孔子言う、「私は十五歳ごろから先王の教え、礼楽の学問をしようと決心した。」としている。しかし、高校生、漢文初学者とも言える彼らに、「学」について「先王の教え」「礼楽」などの解釈は到底望めない。さらに、研究者それぞれによっても、論語の解釈もいくらか変わり、それは生徒ならば尚のことである。難しさのいくつかである。

『論語』を教材として使用して、どんな力をつけるのか、どんな言語活動を用いるのか。これらのことは、国語総合のほとんどに『論語』が載せられている以上、一つの注目点である。

本稿は、『論語』を、コンパクトな中にも深さや広さを持つものとし、テキストの含意を読み取ることの教材として扱ったものである。目標としては、「テキストの内容をおお

まかに読み取る。」とし、読む力を高めることをねらいとした。これは、学習指導要領における、国語総合「C 読むこと」の「イ 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりすること。」に準拠したものである。また、言語活動として、テキスト内容の「説明」をさせることとした。ただし、先述のとおり、『論語』理解の難しさのため、また、口頭で単に説明するだけでは不十分になると考え、補助として「みること」を援用したものを取り入れ、『論語』を図解させることとした。

『論語』を読み、その解釈を図にすることで理解を深め、かつ、その図を用いつつ受け手に説明する。受け手は、説明を聞くだけでなく、図をみながら理解を深める。このような一連の言語活動を取り入れることとした。また、それぞれはグループワークによって行うこととした。なお、「みること」については、二〇一五年八月二六日、中央教育審議会の教育課程企画特別部会がまとめた「教育課程部会　論点整理」に共通必履修科目の在り方」として「読むこと」と併記されている。

授業の流れ

第一時　『論語』図解例をスライド提示
　　グループで『論語』解釈および図作成
第二時　グループで『論語』解釈および図作成
第三時　他グループに説明および教師による発問と講義
　　＊説明は、四分間で質疑応答を含んで行う

実践の実際

実践は三月中旬に行った。『論語』図解例には、大修館書店『精選国語総合 新訂版』のものを使用した（図1）。この図解の一つのポイントは、上の二つの図解によりテキスト叙述は表現されているが、それらを総合したまとめとして下の図解が載せられているところである。つまり、字面だけの表現でなく、テキストの内容解釈が一歩進められているのである。学習者にはそのことを伝えながらスライド提示した。

次に、解釈および図解対象の『論語』であるが、五つの章句を選んだ（次ページ図2）。これらはそれぞれ、「学ぶ」と

図1　『精選国語総合 新訂版』［国総346］

いうことに関連して述べられたものである。これらを選択したのは、最終時の発問の際に「これらに共通するものは何か」を問うことによって、解釈による理解・説明を受けての理解の状況を確認するためである。また、学習者が今まさにその状態にある、「学ぶ」ということが古今に変わらずテーマとなることを知らせ、『論語』に親しみを持たせるためでもある。

図解は、基本的な図形のみを用いて行わせることとした。すなわち、丸・四角・三角・矢印・線などである。漫画的な絵や、いわゆる「棒人間」などを用いることを禁止した。

（例）子曰、「学而不思、則罔。思而不学、則殆。」

① 子曰、「古之学者為己、今之学者為人。」
② 子曰、「由、誨女知之乎。知之為知之、不知為不知。是知也。」
③ 子曰、「吾嘗終日不食、終夜不寝、以思。無益。不如学也。」
④ 子曰、「学而時習之、不亦説乎。有朋自遠方来、不亦楽乎。人不知而不慍、不亦君子乎。」
⑤ 子曰、「吾十有五而志于学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而従心所欲、不踰矩。」

図２　図解の対象とした『論語』

『論語』にあらわされた観念を表すためには、抽象化されたものが好ましいと考えた。また、出来る限り、言葉を少なく用いることとした。言葉を図へと変換することが思考を促し、読む力を高めることへとつながると考えた。

図作成時には、学習者は様々な苦労をしていた。取り上げた章句について今までに見知ったことのある者もいたため、なんとなくの解釈は出来たものの、図解するにあたって、その〝なんとなく〟という不十分さに苦心していた。例えば、⑤「吾十有五～不踰矩。」について、彼らはそれぞれの年齢でのこと、四十歳になって迷わないようになった、などは知っていたが、「ところで、いったいこれらは何を伝えようとしているのだろう」「何歳のところに重きがあるのだろう」「その根拠は何だろう」などと悩み始めた。また、どのような図形を用いることがより効果的だろうと苦心していた。例えば、③「吾嘗終日不食～不如学也。」について、彼らは「棒人間を使えれば、簡単なのに…」「いや、「以思」とか「無益」とかはかえって難しいかも」などと悩んでいた。悩みながらグループで知恵と力を合わせ、図の作成に進んでいた。

説明は、自グループが分散して、他グループに作成図（次ページ図3・4）をもとにしながら行うものとした。ジグソー法の前段階のイメージである。また、説明だけでなく、質疑応答を含めての四分間の設定とした。学習者から様々な質疑

や感想が出ていた。「どうして、円形にしたの？」「最終的には、孔子は何を伝えたいの？」「わかりやすかったよ、ありがとう！」「なるほど、こうやって人間は拡がっていくんだね」「『論語』って勉強になるね」などである。それぞれの質疑や感想に対して、説明する側は熱心に応えていた。それ以外にも、教師に対して「これ、いい感じでしょ！　見て見て！」などと言ってくる者もいた。なお、この後、「図解の改善を図りたいグループは、してもいいよ」と提案したところ、半分以上のグループが改善をした後に提出をしてきた。

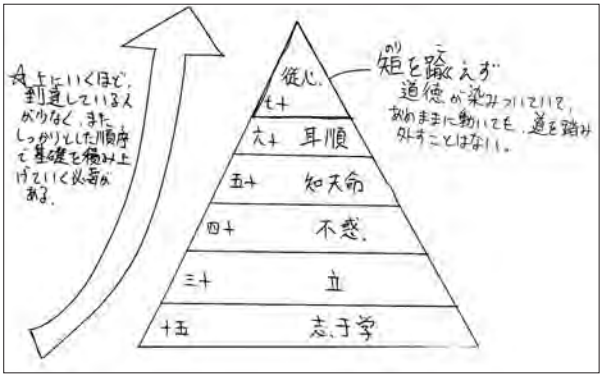


図３　生徒作品例 ⑤章

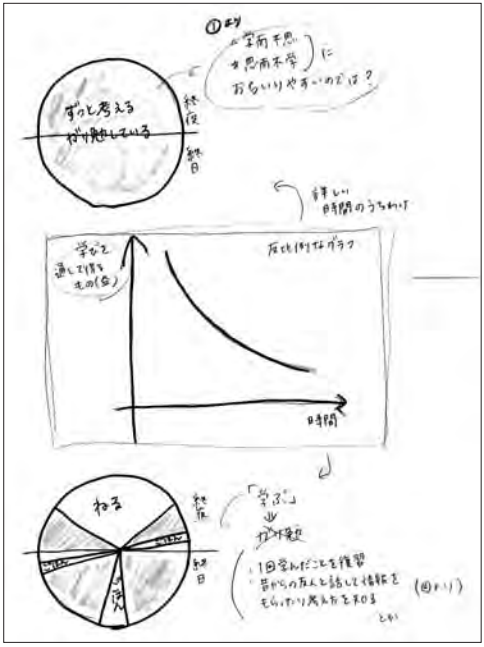


図４　生徒作品例 ③章

まとめ

事後アンケートには、「『論語』を読むのは初めてだったのですが、図を用いたり、自分の言葉で説明する中で理解が深まったと思います。」とあった。図解および説明をさせることで、学習者は『論語』の内容を集中して、あるいは、メタ認知して解釈しようとしたと考える。ただし、「図解は難しい」、学習者の感想にはこれも多かった。また、『論語』の全てが図解に向いているとも言えない。非常に図にしにくいものもあるだろう。とはいえ、『論語』の図解は、言語活動として活用することもできるだろうし、教師による講義の補助資料として活用することもできるだろう。図解は、活用のしがいのあるアクティブ・ラーニングだと考える。

付属資料のご案内

「指導資料セット」内に、新たな一冊が加わりました。
「学習課題ノート」も全面刷新。大修館の「国語総合」を強力にサポートします。

指導資料 言語活動編 ――アクティブ・ラーニングに向けて

言語活動に特化した指導資料が新登場！

B5判・2色刷

身近なところから始められるアクティブな授業のアイデアをご紹介。ワークシートのデータも豊富にご用意しました。
いつでも、どなたでもアクティブ・ラーニングを始められます。

言語活動の手法など、基本をまとめた資料編も充実させました。

指導資料セット

- 指導資料
- ★ 指導資料 言語活動編 ―アクティブ・ラーニングに向けて
- 授業展開指導ノート
- 補助資料集
- 問題集 「基本」「標準」「発展」の難易度別に刷新。「実力問題集」を新設！

- 付属資料CD-ROM
- ★ 朗読CD 今回からセット内に入りました。

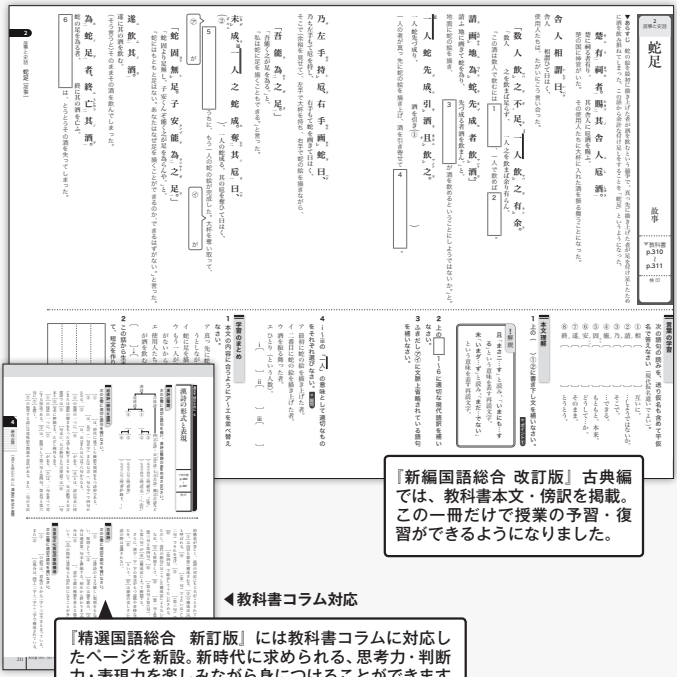
別売

- 学習課題ノート 全面リニューアル
- 指導資料CD-ROM
- ★ デジタル教科書

別売 学習課題ノート

全面リニューアル！

教科書に完全準拠した生徒用ノート。コラムに対応したワーク、「実力問題」なども掲載し、活用の幅が広がりました。 B5判・2色刷・別冊「解答・解説編」付



『新編国語総合 改訂版』古典編では、教科書本文・傍訳を掲載。この一冊だけで授業の予習・復習ができるようになりました。

◀教科書コラム対応

『精選国語総合 新訂版』には教科書コラムに対応したページを新設。新時代に求められる、思考力・判断力・表現力を楽しみながら身につけることができます。

▼論考

『論語』と『徒然草』

田口和夫
（文教大学名誉教授・教科書編集委員）

第十三段の老荘

ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむわざなる。

文は文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇。この国の博士どもの書ける物も、いにしへのは、あはれなる事多かり。（第十三段）

兼好法師の愛読書は『文選』『白氏文集』に並んで、「老子のことば」（『老子道徳経』）、と「南華の篇」（『荘子』）であった。ここに『論語』はない。ところが『徒然草』には、老荘以上に『論語』の引用が多いのである。「愛読書に挙げないのに、その愛読書以上に引かれている『論語』」という観点なら、少しは物が言えそうである。

最近、「吉田兼好」は存在しなかったという趣旨の、刺激的かつ説得力のある論を展開された小川剛生氏に、この章段について説かれた文章がある。『論語』に進む前に、それを引く。

老子・荘子は、天衣無縫にして奇抜な譬喩表現が平安時代より文学者に愛好されてきた。但し日本には道教が根付いていないため、その思想的な受容となると寥々たるものである。そのような中、13段「文は文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇」と、愛読書に老荘を挙げたのは、やはり象徴的であり、表現にも影響は明らかに見て取れる。隠遁者の自由な境遇、あるいは何者にも束縛されない自然な生を称揚しているのは、とりわけ注意してよい。

（『新版徒然草』角川ソフィア文庫、解説）

最後に「注意」される老荘との関わりは、兼好法師の発想の基盤と結ぶものとして確認しておいて良いであろう。表現上の影響としては、例えば第三十八段、『徒然草』には珍しく漢文的表現を多用して、語気鋭く主張を展開しているのだが、「いみじかりし賢人・聖人、みづから賤しき位にをり、時にあはずしてやみぬる、また多し」は、その名を現さないけれども『文選』の「老子・荘周、吾之師也。親居賤職」に依る表現であり、同段の「智恵出でては偽りあり」は『老子』、「可・不可は一条なり」は『荘子』、「まことの人は、智もなく、徳もなく、功もなく、名もなし」も『荘子』に依っている。また、教科書（『新編古典B』「古

B 313］）でも採用した第九十七段「小人に財あり、君子に仁義あり」も、その文章の歯切れ良さや意表を突くような発想が『荘子』駢拇篇に依るなど、老荘の影響は明確に指摘できるのである。

「紫の朱うばふことを悪む」第二百三十八段

『論語』という書名を挙げることの少ない『徒然草』の中で、『論語』を明示したこの部分は兼好法師の自讃を書き連ねた中の第二番目である。後醍醐天皇がまだ皇太子であったころ、兼好が東宮御所にいた主筋の堀河大納言の許へ参上したところ、

論語の四・五・六の巻をくりひろげ給ひて、「ただ今、御所にて、紫の朱うばふことを悪むといふ文を御覧ぜられたき事ありて、御本を御覧ずれども、御覧じ出だされぬなり。『なほよくひき見よ』と仰せ事にて、求むるなり」と仰せらるるに、「九の巻のそこそこの程に侍る」と申したりしかば、「あなうれし」とて、持て参らせ給ひき。

これは『論語』陽貨（十巻本、巻九）に見える句で、若い東宮や堀河大納言が見付けるのに苦労していたのを、おそらくまだ滝口の侍だった兼好が即座に解決したというのである。これが自讃七箇条の一つとして挙げられたのには、何かの意味があろう。兼好はこの後さほど遠くない頃に出家したと考えられるのだが、滝口の侍の一人に過ぎなかった兼好の存在がこの事で改めて確認され、評価されたという事があったのではないかと思うのである。それはさておき、私の印象に過ぎないが、「紫の朱を奪う」を切り取ってみると、『論語』よりも『荘子』あたりにあってもおかしくないような表現に思える。そのために兼好の印象に残っていたという可能性はあるが、それにしても「『論語』にある」と指摘するのではなく、それが見える巻の「そこそこの程」まで指摘するということは、『論語』を読み込み、しっかり記憶していなければできないことであろう。それでも『論語』は兼好法師の愛読書ではなかったのである。

「論語といふ文にも侍るなる」第百八十八段

この段は説経師になろうとした法師の話、碁を打つ人の話、東山と西山に行く人の話を通して、「一事を励むべきこと」を強調した後で、「ますほの薄、まそほの薄」という和歌の秘事を尋ねようと、雨を厭わず出かけていった登蓮法師の逸話を引いて

「敏き時は則ち功あり」とぞ、論語といふ文にも侍るなる。この薄をいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。

と結ばれる。これは『論語』陽貨と堯曰の二か所に「敏則有功」と見える表現である。「悪紫之奪朱」を所在する個所まで指摘できた兼好法師にとって、「論語といふ文にも侍るなる」という表現は、本当は明確に知っているのに、意図的におぼめかしたものとしか言いようがない。本文を草するにあたって依拠した三木紀人氏『徒然草全訳注』（講談社学術文庫）の語釈では、

あるそうです。この「なる」は断定とも伝聞ともされる。『諸注集成』は「伝聞では、説得の気魄が欠ける。強意の断定説によりたい」とし、『全注釈』は伝聞ととって「ここでは、はっきりと引用せずに、婉曲に引用してみせたのである」とするが、後説が妥当か。兼好が『論語』に通じていた

ことは本書に明らかだが、わざとおぼめかして伝聞の形で引いたものであろう。上の「といふ文にも」の言い方にもその感じがある。

とある。私もこの三木氏の見解に賛同する。では、なぜ「おぼめかした」のか。私は兼好法師の含羞だったと思うのである。野球の巨人・阪神のファン気質をここに引くのは突然だが、大学の同僚教師に熱心な虎ファンがいて、事あれば六甲おろしを歌い上げていた。一方、私は四番バッターばかり集める金権ぶりに辟易しながら、それでも隠れ巨人ファンであった。そういう私から見ると、兼好法師にとって、『論語』はあまりに四番バッターであり過ぎたのではないか。しかしそれは彼の血肉と化してしまっている。今さらしらしく『論語』のここにありますよ、などとは恥ずかしくて言えないセリフだったと思えるのである。

前に引いた二百三十八段の記事についても、三木氏は次のように言われる。

古典は、少なくとも『徒然草』執筆時の兼好の本領とするところである。その領域についてこの程度のことを自讃の種にするのは気がさしたのか、回想部分と同程度の余白を使って弁解を試みて、小事を自讃した前例を述べている。

「自讃」は、例えば大江匡房の『江談抄』（『暮年記』にもある）に「自讃有十余」として「四歳読書、八歳通史記」以下を列記して自讃する先例があるが、匡房ほど手放しではなく、おぼめかしたのは、やはり『論語』であったからと考えたい。

兼好法師にとって、老荘は表向きに称揚できる、隠遁者向き、大人の読み物であった。一方、『論語』は、誰もが学ぶ標準の教養書で、知識人ならば知っていて当たり前のものであった。だから老荘は愛読書として名指しされ、『論語』は明示せずに、文章の中に消化されて生きたのである。

付　『論語』のある章段一覧

『徒然草全訳注』の指摘を主とし、新日本古典文学大系『方丈記　徒然草』（久保田淳氏校注）も併せて、『論語』の語句が用いられているとする章段を次に一覧する。注釈者によって、それは一般語句であって、直接に『論語』由来ではないと認定するものもあり、あまり厳密なものではないが、その傾向は確認できよう。数字は段、その後に『論語』篇名を記す。念のため、老荘関係も（　）で括って示す。

1学而、（7荘子）、（13老子・荘子）、（38老子・荘子）、73述而、85里仁・陽貨、（93老子）、（97荘子）、117季氏、（121老子）、122子罕、129公冶長・子罕、130八佾・公冶長、142子張・衛霊公、151子罕、167公冶長、172季氏、184里仁、188陽貨、211雍也・（老子）、219子罕、233顔淵・衛霊公、238陽貨

一々について考えれば、兼好法師の文章表現の基底に『論語』があることが確認できる。

例えば百十七段、『論語』の「益者三友、損者三友」に依りながら、「わろき者」は七とするのを手がかりに、『徒然草』から『論語』へ遡るなども面白い学習なのである。

教室のお悩み解決！
『論語』の指導Q＆A その2

塚田勝郎（つかだかつろう）
（筑波大学附属高等学校）

■「曰はく…と」にまつわる疑問

Q　教科書の『論語』の文章は短いものが多いのですが、文末の「と」は必要でしょうか。

A　高等学校の教科書では、「曰はく」「云ふ」「以為（おも）へらく」「疑ふらくは」などと訓読した時には、その結びに必ず「と」を置いています。一方、漢籍の注釈書や、一般書での漢詩・漢文の引用では、会話文末に「と」を置かないことが多いようです。特に『論語』に関するものでは、その傾向が顕著です。

会話文末の「と」は、「曰はく、……といふ。」と訓読していた名残と説明されています。（詳細は、本誌第一八四号所載の拙稿「訓読の習慣とその扱い」をご参照ください。）会話文や引用部分にカギ括弧を付さなかった時代には、その範囲を明示するために「と」が不可欠だったのです。

『論語』の訓読で会話文末の「と」が省略される理由は、質問にあるように、孔子の発言が短い章が少なくないことのほかに、「と」が素読や朗唱の妨げになることも指摘されています。しかし、高等学校の漢文教育で、『論語』だけを例外扱いすることには根拠がありません。孔子の発言が短い場合でも、必ず「曰はく、……と。」と訓読することを定着させたいものです。

Q　教科書の漢文を音読する時に、会話文末の「と」の前に間を置くべきかどうか、迷います。

A　難しい問題ですね。先生方は、どうされているでしょうか。会話文末の「と」の読み方のいくつかのパターンを示しましょう。『論語』巻頭の一章を教室で範読するという設定です。紙幅の都合で、「不二亦君子一乎。」の部分のみを取りあげます。

A　またくんしならずや□と。
B　またくんしならずや□と。
C　またくんしならずやと。

Aは、□の箇所で一音分の間を置く読み方です。やや間延びした印象が残るでしょう。Bは、□の箇所で適宜間を置く読み方ですが、「適宜」を数値化できないのが苦しいところです。筆者は割り切って、Cのように読んでいます。「と」の前の間の置き方については、経験を重ねて、自然で自分らしい読み方を作り上げるほかはないでしょう。

蛇足ですが、ある研究授業で次のような読み方に遭遇しました。

先生　またくんしならずや。
生徒　またくんしならずや。
先生　と。
生徒　と。

このように「と」だけを独立させて読むことは不自然でしょう。

Q　「子曰はく」は、どう現代語訳すればよいでしょうか。

A　二つのケースに分けて考えてみます。

1　孔子の発言が短い章

A　先生が言った、「……。」と。

B　先生が言われた、「……。」と。
C　先生の言葉、「……。」（と）。

2　問答を記録した章

D　先生が言われた、「……。」と。子路がお答えした、「……。」と。
E　先生、「……。」子路、「……。」

以上が一般的なパターンでしょうか。「子曰はく」は訳さず、枕詞のように現代語訳の上に置いたり、会話の末尾に「……。」（孔子）と発言者名を記すという形もありますが、高校現場では現実的ではないでしょう。

筆者は、授業ではBとDのパターンを用います。Bは「おっしゃった」とも訳せますが、孔子の神聖化へのささやかな抵抗として、「言われた」にこだわっています。

杏壇礼楽図（『聖蹟之図』、部分）

ところで、「子曰」は古くは「あなつ のたまわく」（「あなつ」は孔子の意）と読まれたそうです。「し のたまわく」を経て、現在の教科書では「し いわく」に統一されています。近年の出版物でも「しののたまわく」（小倉紀蔵『新しい論語』）と読むものがあるのは、興味深い現象です。

■訓読はなぜ変わる？

Q　教科書が変わると、訓読のちがいにとまどうことがあります。どう対処すればよいでしょうか。

A　『論語』の有名な章について、訓読の差異と解釈の関連を整理してみます。

Ⅰ　訓読は異なるが、解釈は同じ。
Ⅱ　訓読が異なり、解釈も異なる。
Ⅲ　訓読は同じでも、解釈は異なる。

「吾日三省吾身。」の「三省吾身。」（学而編）に二とおりの訓読があるのは、Ⅰの例です。「三たび吾が身を省みる。」も「吾が身を三省す。」も、「自分の行ったことをなんども反省する。」の意で、解釈に差はありません。（「三省」を「三つのことを反省する」と解釈する説もあります。）

譬如下北辰居二其所一、而衆星共上之。（為政編）

の「共」を、「共ふ」と読むか、「共す」と読むかは、Ⅱと関わります。「共」は、「向」の意味で解釈すれば「むかう」意であり、「拱」の意味で解釈すれば「拱手の礼をする（敬意を表す）」意となります。

Ⅲの例としては、「川上の嘆」（子罕編）があります。短い記述だけでは、その言葉の背景がわかりません。人間を過去へと押し流すマイナスのイメージと、反対に力強く未来へと時間が継続するプラスのイメージが生まれるのは、そのためです。

記憶に頼らずに、教科書を熟読し、訓読を確認した上で音読の練習もしっかり行いましょう。その上で、自信を持って授業に臨みたいものです。

●孔子と弟子の人物像については
⬇26ページ「『論語』が断然おもしろくなる！　女子のための人物紹介」
●『論語』をもっと読むには
⬇29ページ「目的別『論語』を知るためのブックガイド」
●もういちど疑問をおさらい！
⬇11ページ「『論語』の指導Q&A　その1」

『論語』が断然おもしろくなる！ 女子のための

人物紹介

祐木亜子（ゆうきあこ）
（中国古典研究家）

『論語』と聞けば〝生徒が授業に乗ってこない〟とお悩みの先生もいらっしゃるでしょう。しかし『論語』ほど〝切り込み方〟次第でおもしろく読める古典もありません。今回の切り口は、〝孔子と門人たちの性格について高校生にも分かりやすい言葉で紹介する〟というもの。授業の導入としてご活用いただければ、〝いるいる、こんな人！〟〝私ならこのタイプが好き〟と、教室が盛り上がること請け合いです。

哲の十言語徳行

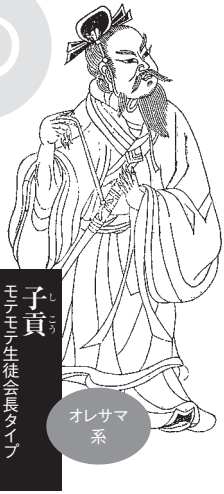
孔子

穏やかで素直、ひかえめで謙虚な人柄。弟子に対して厳しくも愛情をかける人情家であると同時に、生涯、仁を守り道を求め学び続けた情熱家でもある。

部活キャプテン系

子路（しろ）（季路（きろ））
気のいい番長タイプ

ワイルドでバイタリティーあふれる快男児。間違ったことが大キライな正義感の強い人。誰に対しても物おじせず話が



オレサマ系

子貢（しこう）
モテモテ生徒会長タイプ

頭は切れるし口は立つし金儲けも上手だから華やかで目立つタイプ。幅広い知識と先を見通す能力をフルに生かし外交や交渉事で大活躍する。孔門第一の金持ちで才能あふれる自信家ゆえに人を批判したり貧しい人を見下したりする〝上から目線〟のところも。ともすると多弁で才気ばしるのを孔子にたしなめられる。

始可二与言一レ詩已矣。
（始めて与に詩を言うべきのみ。）

メガネ男子系

顔淵（がんえん）（顔回（がんかい））
ちょっと病弱な優等生タイプ

頭が良く真面目な勉強家。でも単なる知識オタクじゃない。孔子の教えを日常生活の中で実行できたのは弟子の中で彼一人。自分には厳しく人にはやさしく穏やかに接するので誰からも慕われ信頼される。金儲けや出世なんて興味なし。ひたすら孔子を尊敬し、楽しんで道を求める求道者。孔子の愛弟子。

聞レ一以知レ十。
（一を聞いて以て十を知る。）

オトナ男子系

仲弓（ちゅうきゅう）（冉雍（ぜんよう））
包容力のある社長タイプ

思いやりがあり度量の大きい人格者。孔子に〝彼は立派な政治家になれる〟と太鼓判を押される。口下手でひかえめな彼の性格に孔子は好感を持っている。

仁而不レ佞。
（仁なれども佞ならず。）

いやし系

閔子騫（びんしけん）
おっとり坊ちゃんタイプ

家族思いの優しく穏やかな性格。金儲けしたい、偉くなりたいというギラギラしたところがない。いつもは無口だが、いざというときには正義を貫く好男子。

不レ間二於其父母昆弟之一言。
（其の父母昆弟の言を間せず。）

孔門

政治

できる率直で飾り気のない性格が彼の持ち味。勇敢で一本気な男らしい性格だけどヤボでガサツな面も。無鉄砲ででしゃばりなところが玉にキズ。正直で素直な人柄が孔子に愛される。

好レ勇過レ我。
（勇を好むこと我に過ぎたり。）

知的クール系

冉求（冉有）
できるビジネスマンタイプ

マルチな才能を持ち仕事をテキパキとこなす実務家。引っ込み思案な性格から、失敗や批判をおそれて、先に言い訳を用意するズルいところがある。人の道に外れたことをして孔子から〝お前など仲間ではない〟と言われたことも。

於レ従レ政乎何有。
（政に従うに於いて何か有らん。）

マイペース男子系

宰予（宰我）
世渡り上手なお役人タイプ

語り口さわやかな弁論の達人。要領よく何でも器用にこなすすもある。ただ、偉そうなことを言う割にはだらしなく、昼寝をして叱られるなど実際の行動が伴わないのが彼の欠点。〝不人情な上にしかっても改めない男〟と孔子に匙を投げられる。

朽木不レ可レ雕也。
（朽木は雕るべからざるなり。）

いい人系

冉伯牛
やさしいお母さんタイプ

人の気持ちがよくわかる思いやりに満ちた人。その人柄は〝心優しく親切な彼がハンセン病にかかるなんて運命としか言えない〟と孔子が嘆き悲しむほど。

斯人也、而有レ斯疾一也。
（斯の人にして斯の疾有りや。）

文学

サブカル男子系

子遊
負けず嫌いな芸術家タイプ

礼儀正しく音楽に通じた文化人。ポジティブ思考の子張や学問好きの子夏にひそかなライバル意識を燃やす。生真面目過ぎて孔子にからかわれることも。

学レ道則愛レ人。
（道を学ぶときは則ち人を愛す。）

文学オタク系

子夏
感性豊かな学者タイプ

頭の回転が速く、あざやかな発想の転換ができる学者タイプ。文学好きだが細かいことにこだわる学問オタクの面も。孔子から〝知識バカになるな〟と釘をさされる。

為二君子儒一。
（君子の儒と為れ。）

大器晩成系

曾子（曾参）
マジメで一途な忠犬タイプ

自分の行いや友達とのつきあいにおいて真心と思いやりを大切にする善良な人。不器用で呑み込みは遅いけど孔子の教えを忠実に守り、こつこつ努力するところが彼の魅力。心のあたたかい親孝行息子でもある。

吾日三二省吾身一。
（吾れ日に吾が身を三省す。）

ギラギラ系

子張
チャレンジ精神旺盛な肉食男子タイプ

仕官や出世を積極的に求めるエネルギッシュな人。困難なことも努力してやり遂げるがんばり屋だが、名声や評判を得ようと見栄を張るところもある。孔子から〝何事も行き過ぎだ〟と言われる。

為レ難レ能也。
（能くし難しと為す。）

●参考　原文・書き下し文・現代語訳

＊〈　〉内は編名・巻・章を示す

【顔淵（顔回）】がんえん（がんかい）

回也　聞レ一　以知レ十。〈公冶長五九〉

回や一を聞いて以て十を知る。訳回は一を聞けば十を悟る明敏な人です。（子貢の言葉）

【子路（季路）】しろ（きろ）

由也好レ勇　過レ我。〈公冶長五七〉

由や勇を好むこと我に過ぎたり。訳由の勇気のあることは自分以上だ。（勇み立つ子路の様子を見て）

【子貢】しこう

賜也始可二与言レ詩　已矣。〈学而一五〉

賜や始めて与に詩を言うべきのみ。訳賜よ、お前こそ本当に詩のわかる者だ。（子貢が「切磋琢磨」について質問したのに対して）

【冉求（冉有）】ぜんきゅう（ぜんゆう）

求也芸。於レ従レ政　乎何有。〈雍也六六〉

求や芸あり。政に従うに於いて何か有らん。訳求は多芸である。政治に従事することについて何の問題もない。

【宰予（宰我）】さいよ（さいが）

宰予昼寝。子曰、「朽木　不レ可レ雕　也。」〈公冶長五十〉

宰予　昼寝ねたり。子曰はく、「朽木は雕るべからざるなり。…」と。訳宰予が昼寝をした。孔子は（強く責めて）「腐った木には雕刻はできない。（心が腐った者を教えても無駄なことだ。）…」と言った。

【仲弓（冉雍）】ちゅうきゅう（ぜんよう）

或曰、「雍也仁　而不レ佞。」子曰、「焉用レ佞。」〈公冶長五五〉

或るひと曰はく、「雍や仁なれども佞ならず。」と。子曰はく、「焉くんぞ佞を用いんや。…」と。訳ある人が、「雍は仁者だが、惜しいことに弁才がない」と仲弓を批評した。これを聞いて孔子は、「何も弁才の必要はない。…」と言った。

【閔子騫】びんしけん

孝哉　閔子騫。人不レ間二於　其　父母昆弟之言一。〈先進二一四〉

孝なるかな閔子騫。人　其の父母昆弟の言を間せず。訳閔子騫は孝行だなあ。父母兄弟が閔子騫をほめる言葉に対して、世間の人で誰一人、異議をさしはさむ者がない。

【冉伯牛】ぜんはくぎゅう

斯人也、而有二斯疾一也。〈雍也六八〉

斯の人にして斯の疾有るや。訳こんなに立派な人なのに、こんなひどい病気になってしまうとは。（伯牛を見舞った孔子の嘆き）

【子遊】しゅう

君子学レ道　則　愛レ人、小人学レ道　則易レ使也。〈陽貨十七四〉

君子道を学ぶときは則ち人を愛し、小人道を学ぶときは則ち使い易きなり。訳為政者が礼楽の道を学べば、人民を愛するようになる。人民が礼楽を学べば、従順になり使いやすくなる。（武城の町の長官である子遊が守っている孔子の教え）

【子夏】しか

女為二君子儒一。〈雍也六一〉

女、君子の儒と為れ。訳おまえは学者となるからには、君子の学者になるがよい。

【曾子（曾参）】そうし（そうしん）

吾日三二省吾身一。〈学而一四〉

吾日に吾が身を三省す。訳私は毎日何度も自分自身を反省する。（曾子の言葉）

【子張】しちょう

吾友張也、為レ難レ能也。然而未レ仁。〈子張十九一五〉

吾が友張や、能くし難しと為す。然れども未だ仁ならず。訳わが友の子張は、我々の及びがたい立派な人材であるが、まだ仁の道には十分に達しているとはいえない。（子遊の言葉）

目的別『論語』を知るためのブックガイド

平井 徹（慶應義塾大学）

＊国内の著作物で、戦後刊行のものに限って選定した。
＊版を変えているものについては、最新のもので示した。
＊できるだけ入手しやすいものとして、文庫・新書を多めに採録した。

■『論語』本文と訳・解釈を読むには

○金谷治『論語』岩波文庫　一九六三

○木村英一『論語』講談社文庫　一九七五
特に巻末の解説部分が優れている。

○宇野哲人『論語新釈』講談社学術文庫
一九八〇　朱子の新注による解釈。

○吉川幸次郎『論語』上・下　朝日選書
一九九六

○加地伸行『論語』講談社学術文庫　二〇〇九
増補版　中高生にはまず、同氏『論語』選訳本（角川ソフィア文庫・ビギナーズクラシックス、二〇〇四）をすすめる。

○神鷹徳治編『傍訓論語』游学社　二〇一三
原典の影印。カタカナで全ての読みが付され、江戸時代の読み方が具体的にわかり、副教材にも使える。

■『論語』の世界を知るには

○金谷治『論語の世界』（NHKブックス）日本放送出版協会　一九七〇

○鈴木修次『文学としての論語』東京書籍
一九七九　口承文学、修辞の側面から照射する。

○鈴木修次『論語と孔子』PHP研究所
一九八四

○村山吉廣『論語名言集』中公文庫　一九九九

○村山吉廣『論語のことば』財団法人斯文会
二〇〇二　村山氏の両書は、高校生にも十分読みやすい。

○一海知義『論語語論』藤原書店　二〇〇五
講義録がベース。言語感覚に対する冴えを感じる。

○弥和順『論語―珠玉の三十章』（あじあブックス）大修館書店　二〇〇七　英訳と中訳つき。

○加地伸行『「論語」再説』中公文庫
二〇〇九

○加地伸行『論語のこころ』講談社学術文庫　二〇一五

○井波律子『論語入門』岩波新書　二〇一三

○湯浅邦弘『論語―真意を読む』中公新書
二〇一三　出土資料研究の成果を反映。

■孔子とその時代・社会について知るには

○加賀栄治「『論語』の背景―孔子とその時代」（『文化講座講演録 論語』所収）大東急記念文庫　一九七四

○常石茂『論語を読む』勁草書房　一九八一

○李長之（守屋洋訳）『人間孔子』徳間文庫　一九八九

○金谷治『孔子』講談社学術文庫　一九九〇
一冊の文庫本では、内容的に最も完備したもの。

○宇野茂彦『孔子ものがたり―人の道　天の道』財団法人斯文会　一九九五

○蜂屋邦夫『孔子―中国の知的源流』講談社現代新書　一九九七　堅実な内容を平易に説き、儒家の道統にも詳しく言及する。

○白川静『孔子伝』中公文庫BIBLIO
二〇〇三　儒の源流と儒家集団についても詳説。

○高木智見『孔子―我、戦えば則ち克つ』（世界史リブレット）山川出版社　二〇一三
小冊子ながら、最新の研究を踏まえ、歴史的観点から孔子を位置づける。

○加地伸行『孔子』角川ソフィア文庫
二〇一六

■碩学が語る『論語』の読み方にふれるには

○武者小路実篤『論語私観』新潮文庫
一九五四

○小倉芳彦「論語耽読」（『古代中国を読む』所収）岩波新書　一九七四
『論語』の読み方に試行錯誤を重ねた著者の告白。
○吉川幸次郎『論語について』講談社学術文庫　一九七六
○吉川幸次郎『中国の知恵―孔子について』ちくま学芸文庫　二〇一三
○桑原武夫『論語』ちくま文庫　一九八五
巻末の「私と『論語』」が秀逸。
○駒田信二『「論語」その裏おもて』旺文社文庫　一九八五
○駒田信二『論語―聖人の虚像と実像』（同時代ライブラリー）岩波書店　一九九三　駒田氏の両書は、複眼的な思考で、随所に深い洞察力を示す。
○和辻哲郎『孔子』岩波文庫　一九八八
○山本七平『論語の読み方』祥伝社　一九八五
○宮崎市定『論語の新しい読み方』（同時代ライブラリー）岩波書店　一九九六
○金谷治『論語と私』展望社　二〇〇一

■「中国史の中の儒教」について知るには

○宇野精一『儒教思想』講談社学術文庫　一九八四
○戸川芳郎・蜂屋邦夫・溝口雄三『儒教史』山川出版社　一九八七
○村松暎『儒教の毒』PHP文庫　一九九四
儒教の功罪と思想の陥穽を鋭く指摘する。
○浅野裕一『孔子神話』岩波書店　一九九七
○浅野裕一『儒教　ルサンチマンの宗教』平凡社新書　一九九九　孔子とその学派の「怨念」を軸に説く、極めて示唆に富む儒教論。前掲『孔子神話』を一般向けに書き改めたもの。
○陳舜臣『儒教三千年』中公文庫　二〇〇九
中庸を得ており、まず手に取るべき一書。
○加地伸行『沈黙の宗教―儒教』ちくま学芸文庫　二〇一一
○加地伸行『儒教とは何か　増補版』中公新書　二〇一五

■図像や史跡関係の資料を探すには

○孔徳懋（こうとくぼう）（和田武司訳）『孔子の末裔』筑摩書房　一九九一
近代史のなかで翻弄された末裔の秘話。
○加地伸行『孔子画伝』集英社　一九九一
孔子聖跡図により、その生涯を描く。大判でカラーページも多く、見ていて楽しい。
○江連隆『論語と孔子の事典』大修館書店　一九九六　全てに重宝で座右に置きたい。
○坂田新『論語紀行』（NHKライブラリー）日本放送出版協会　二〇〇〇　番組取材で孔子ゆかりの地を巡った著者の史跡案内。
○孔祥林（こうしょうりん）（三浦吉明訳）『図説孔子』国書刊行会　二〇一四　大判の図版資料。世界における孔子の思想についても紙幅を割く。

■小説・マンガなどで楽しむには

○中島敦「弟子」（ちくま文庫『全集』など）
○黒須重彦『論語ものがたり』学燈社　一九七三　小学生のための中国文学全集の一冊で、児童版論語の決定版。新井五郎の挿画も素晴らしい。入手しづらいのが残念。
○下村湖人『論語物語』講談社学術文庫　一九八一
○酒見賢一『陋巷に在り』全十三巻　新潮文庫　一九九二～二〇〇二　霊能者顔回の視点から見た孔子を描く。とにかくおもしろい。
○竹川弘太郎（作）・ももなり高（たかし）（画）『孔子』全三巻　講談社漫画文庫　一九九九
○猪原賽（いはらさい）（原作）・李志清（りせい）（作画）『孔子と論語』全三巻（コミック文庫）メディアファクトリー　二〇一〇

■学術的にさらに極めたい人には

○板野長八「孔子」（『中国古代における人間観の展開』所収）岩波書店　一九七二
○渡邊卓「孔子伝の形成」（『古代中国思想の研究』所収）創文社　一九七三
○澤田多喜男『「論語」考索』知泉書館　二〇〇九

平成29年度用 大修館「国語総合」のご案内

国語総合 改訂版
現代文編　古典編

［国総３４４・３４５］
Ａ５判３２６ページ／２３８ページ

大学入試を意識したハイレベルな教材とコラムを設置、最高峰の分冊本

装丁メモ
装画は「日本のゴーギャン」と称された鬼才、田中一村（たなかいっそん）の代表作です。

精選 国語総合 新訂版

［国総３４６］Ａ５判４５８ページ

次世代の国語への「挑戦」
国語総合の
新たなスタンダード

装丁メモ
生徒の個性の伸びやかな成長と
個性が響き合う様子を表しました。

新編 国語総合 改訂版

［国総３４７］Ａ５判４０６ページ

実社会で活きる国語力を伸ばす
新鮮な発見にあふれた教科書

装丁メモ
穏やかな青空とほのぼのと浮かぶ雲。
ゆとりある高校生活への願いを込めました。

豊富な教材で系統的な指導ができる教科書

国語総合 改訂版 現代文編 古典編
【国総344・345】

特色

POINT ① 主要テーマを押さえた、評論教材のさらなる充実

現代文編では評論単元を2単元増補、評論教材数14本から18本に増補。**入試を意識して精選した新規教材8本**を収録。いっそうのレベルアップを図りました。

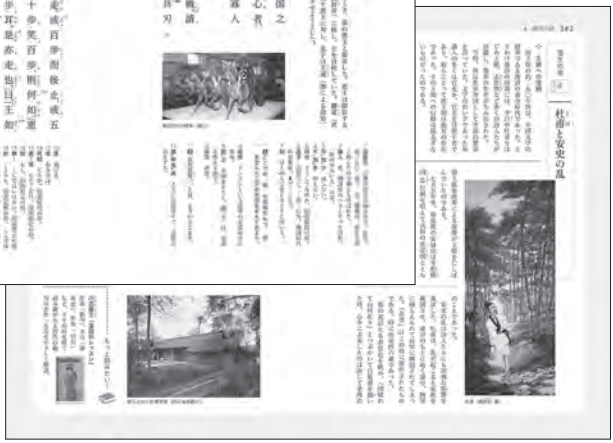
POINT ② 評論、小説をより深く理解するために役立つコラムを11本掲載

現代文編の各単元末に設置したコラム**「評論の視点」「文学の視点」**は、単元テーマの深い理解を誘う内容で、**重要キーワード**も習得できます。

POINT ③ 古典の単元増補、教材化の刷新

入試を意識した単元の増補や、入門単元、教材化の刷新を行いました。コラムは、基礎知識をまとめた**「古文を読むために」「漢文を読むために」**、古典の世界を広げる**「古文の窓」「漢文の窓」**の二本立てとしました。

読みやすい分量の教材を増補。教材理解に役立つ図版も豊富に収録。



生徒の興味と学びを広げる読み物コラムを新設。

学習意欲を高める、見やすく機能的な教科書

精選 国語総合 新訂版 【国総346】

特色

POINT ① 「現代」を射抜く斬新な教材群

池谷裕二、國分功一郎、西研など、**新鮮な筆者陣による評論**を多数収録。入試頻出の鷲田清一、福岡伸一、香山リカなど、安定した人気を誇る評論も。**小説は近現代文学の珠玉の作品**を厳選、安心して授業できる名作ぞろい。

POINT ② アクティブ・ラーニングに対応した言語活動教材

「言語活動」「豊かな言語活動のために」を設置。日常的な活動から、本格的な課題解決型学習まで、幅広い活動を紹介。**別冊指導資料『言語活動編』**でサポートも万全。

POINT ③ 論理的思考力や表現力を培うコラム

教材をふまえて論理的思考へと誘うコラム**「思考を深める」**。文学作品の表現技法に着目するコラム**「表現を味わう」**。古典では、コラム**「古文を読むために」「漢文を読むために」**で文法など基礎的な事項をわかりやすくまとめた。

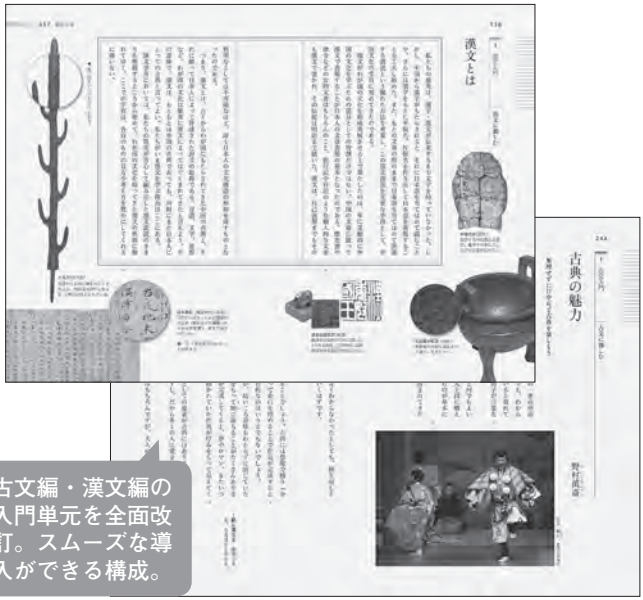
POINT ④ 教材の背景を知り、読書へと広げる

入試頻出の現代的テーマを網羅し、読書活動へと誘うコラム**「広がる読書、広がる世界」**を各単元に設置。**「古文の窓」「漢文の窓」**では古典の背景知識を平易に解説。

POINT ⑤ デザインを全面刷新、教材化の工夫を徹底

学習意欲を高める、**見やすく機能的なレイアウト**を実現。古典では入門単元を全面リニューアル。古典との出会いを楽しみ、スムーズな学習の流れができるよう配慮しました。

古典を読むために必要な知識をわかりやすく図解しています。



古文編・漢文編の入門単元を全面改訂。スムーズな導入ができる構成。

目で見て感じる、魅力的な教科書

新編 国語総合 改訂版
【国総347】

特色

POINT ① 現場の声を反映した教材、単元構成

新教材を含めて、**より使いやすく構成を組み替え**ました。また、**平和単元**を設置し、平和教材、読書案内のページを設けました。

POINT ② いっそうわかりやすい教材化の工夫

古典の入門単元の教材化を大幅に見直したほか、よりわかりやすさを追求した工夫をこらしました。

POINT ③ 実践的で役に立つ付録の充実

「原稿用紙の使い方」や**「用字用語一覧」「重要古語一覧」「漢文訓読のまとめ」**などを収録。巻末には「古典文学の流れ」「古典名文選」を収録しました。教材理解にも実生活にも役立ちます。

二〇一六年度センター試験の漢文について

諏訪原研（河合塾）

概要

今年は清の盧文弨の随筆『抱経堂文集』に収められた「張荷宇夢母図記」からの出題で、随筆はこれで五年連続です。

生後間もなく母と死に別れた張荷宇が、ある時、夢の中で母に出会い、目覚めた後で母の姿を絵に描きます。その後、母の夢を見ている場面を描いた絵を携えて、筆者（盧文弨）のもとを訪ねます。筆者はそれを見て、母と子の情愛は生死の隔てを越えて通じ合えるのだと荷宇に語ります。母子の結びつきを強調している点で、昨年の、血の繋がりのない母子の情愛をテーマにした出題文と同じです。

本文の総字数は一九二字で、昨年より一五字減少し、一昨年までの二〇〇字以下の水準に戻りました。設問数は七問で、昨年と変わらず、マーク数は一個減って八個でした。

設問内容は、問1と問2が語句の意味に関する問題で、昨年あった文法問題が無くなり、知識問題は計二問に戻りました。訓読、解釈、内容説明等の出題は例年通り。難易度としては、昨年に比べて同等か、やや易化した感じです。

設問の解説

【問1】波線部(1)「有知」、(2)「遊」の意味の問題。

(1)「有知」の前に「生十月而喪其母」（生後十カ月目に母を喪う）とあり、後に「時時念母」（いつも母のことを思う）とあるので、ここの「知」は、「認識能力」の意味であることがわかります。河合塾の答案再現データ（以下同じ）によると、⑤の正答率は実に83％で、漢文の全設問中最高の出来でした。(2)「遊」には、「本来の居場所から離れて、よその地に行く」という意味があり、ここもその用法です。④の正答率は71％で、二番目の出来でした。

【問2】二重傍線部ア「即」、イ「乃」の意味の問題。

「即」には、「すぐに」「つまり」等の意味があり、「乃」には、「そこで」「意外にも」「まさしく」等の意味があります。「即」は「すぐに」で決まりです。「乃」の方は順接の「そこで」と強調の「まさしく」で迷いますが、後文の冒頭である

【問題文】

荷宇生十月而喪其母。及有知、即時念母不置、弥久弥篤。哀其身不能一日事乎母也。哀母之言語動作亦未能識也。

荷宇香河人。嘗南遊而反、至乎錢唐。夢母来前、夢中即知其為母也。既覚、乃嗷然以哭曰「此真吾母也。母胡為乎使我至今日乃得見也。母、又何去我之速也。母、其可使我継此而得見也」。於是即夢所見為之図。此図吾不之見也。今之図吾見之、則其夢母之境而已。

余因語之曰「夫人精誠所感、無幽明死生之隔、此理之可信不誣者況子之於親、其端息呼吸相通、本無有間之者乎」。

（盧文弨『抱経堂文集』による）

ことと前後の文脈から、「そこで」が適当であると判断できます。①の正答率は56％に止まりました。

【問3】傍線部Aの解釈問題。

「時時」には、「時折」「いつも」の両義があり、「念母不置」との意味の整合性を考えます。「置」には「捨て置く」の意味があり、「念母不置」は「母を思って、（その思いを）捨て置かない」、つまり「ずっと母のことを思い続けている」という意味になります。そこから「時時」の意味も「いつも」に決まります。①の正答率は39％で、二番目に低い出来でした。しかも③を選んだ誤答率が50％もあり、全問中唯一正答率を上回った問題でした。

【問4】傍線部Bの返り点の付け方と書き下し文の問題。

「不能～」（～能はず）の読みや、「乎」の置き字の用法、「事」の動詞的用法などがポイントになります。また、直後の一文「哀～未能…也」と文の構造が類似している点に着目します。④の正答率は63％で、まずまずの出来でした。

【問5】傍線部Cの解釈問題。

使役形を含んだ疑問文です。使役形は意訳される（「～させる」と訳さない）場合もあるので注意が必要です。「得見」は二文後にもあり、いずれも「会うことができる」という意味です。従って傍線部は、「お母様、なぜ今日になって私に対して（お母様に）会うことができるようにさせたのです

か」となり、これを意訳したのが正解の④です。正答率は57％で、「～させる」という使役の表現を含んでいた②の誤答率が37％もありました。句形だけに着目せず、文脈や語句の意味も考慮して解くべきでしょう。

【問6】傍線部DとEの内容説明問題。

D「此図」の内容は直前の「即夢所見為之図」（夢に現れた姿に即して母の絵を描いた）に、Eの内容は直後の「其夢母之境」（荷宇が母の夢を見る場面）に、それぞれ示されています。③の正答率の33％は、全問中最低の出来でした。しかも、②の誤答率が29％と僅差で続き、残りの各選択肢もそれなりの誤答率を示していることから、受験生をかなり悩ませた問題だったことがわかります。

【問7】傍線部Fの発言内容に関する説明問題。

まず筆者の発言内容を、末尾の（注）や文中の句形（抑揚形）に留意しながら正確に訳す必要があります。要約すると、「まことの心は生死をも越えて相手に通じるものであり、まして子と親を隔てるものは何もない」となり、この内容に近い③と⑤を選び出します。次に、この発言が生後間もなく母を喪った荷宇に語りかけたものである点に着目して、母の愛情に言及した③よりも⑤のほうが適当であると判断します。正答率は57％で、あまり良くありませんでした。

明暗を分けた問題

一つは誤答率が正答率を大きく上回った問3で、もう一つは最低の出来だった問6が挙げられます。この両者に共通して言えるのは、意味の捉えにくい語句（問3の「時時」「不置」、問6の「所見」「境」）が含まれていることで、これらは前後もしくは全体の文脈を正しく理解して初めて、その意味が判断できるものでした。

来年度の出題予想と対策

今年の語彙に関する設問のうち、「即」と「乃」の意味の識別は、予備知識を持った上での文脈判断でした。また、問3と問5の解釈問題では、昨年と違って予め訓点が付いていましたが、それでも正答率が芳しくありませんでした。従って、重要語句や基本句形などの基本事項をしっかりマスターすることはもちろんですが、さらにそれらをベースにした解釈力、読解力を養成することが重要でしょう。

出題文は、ここ五年随筆が続いていますが、ほかのジャンルの文章にも慣れておく必要があります。漢詩は二〇一〇年を最後に出題されていませんが、漢詩の基礎知識の修得や鑑賞力の涵養など、漢詩対策も怠らないようにしましょう。

石川忠久 著
『石川忠久 漢詩の稽古』

（四六判・並製・二五六頁・本体一八〇〇円＋税　大修館書店）

漢詩を作る。そう言われると、やはりいささか敷居が高く感ぜられるであろう。

理由はいくつも考えられる。まず、言語体系が違う。文法も用語も、当然、漢語を使いこなせねばならぬ（時には古典的な漢語と日本語とで意味や用法が違う）。形式面でも、押韻が必須であるし、絶句や律詩には平仄式もある。見よう見まねで漢字を並べればよいというわけには行かず、どうしても作法書や、よい先生について学ぶことが必要になる。

本書は『漢詩の稽古』というタイトルのとおり、漢詩の作法書であるが、初めて漢詩を作ろうという人向けの入門書ではない。著者が主宰する詩会に集う門下生の方々の原案を実際に添削し、推敲を加えて見せている、いわば実作者に作詩のコツを伝授するための作法書である。

推敲のポイントは六十四項目に亘り、その推敲ぶりは懇切且つ綿密である。まず語法上の誤りに始まって、「わかりにくい表現を避ける」、「和語を用いない」、「和習を避ける」などの基本的とも思われる注意事項が挙げられ、「直伝」として改善法が示される。更には「場面に合った描写をする」、「作中人物に不自然な行動をさせない」、「理屈に合わない発想は慎む」、「情景を単純化し、心情を印象的に訴える」など、詩を作るのに熱中するあまり力が入りすぎ、表現が過剰になりそうな事項についての注意が示されているのも有益な注意であろう。

また、筆者が驚かされたのは、「適切な語に改め韻を換える」、「内容に合わせて題を変える」、「盛りだくさんな内容の詩を二首に作り直す」などの項目であった。作った詩の内容によって、作詩の枠組みを変えてしまうとは、発想の転換というか、ベテランならではの改善法である。

いうまでもないことだが、推敲後の「完成」稿は整った、見事な詩になっている。ただ、経験豊かな方の作例は、筆者からするとこの上の推敲は不要ではないかと思わせるような作品もあり、それにも手を加えてあるのは、用語選びの難しさについて考えさせられるとともに、著者の学識の深さを窺うことが出来る。またこの書のレベルも想像出来るであろう。

基本的なところからハイレベルなところまで楽しく読め、しかも巻末には「用語解説・索引」と指導のポイントをまとめた「稽古索引」が附せられてある。実作者にとっては楽しみながら力がつく書物といってよいであろう。

本書は実作上の「稽古」をまとめた書物なのだが、ここにいわれている諸注意を読み、詩語一語一語（あるいは一字一字）の果たしている役割の重さ、情景描写と心情表現の関係などに目を向けるようになれば、詩を作らない方にとっても、詩を読む力、鑑賞する力が増すことになるだろう。実作者のみならず、広く漢詩を愛好する方にお勧めしたい書である。

（田口暢穂・鶴見大学名誉教授）

串田久治・諸田龍美 著
『漢詩酔談――酒を語り、詩に酔う』

（四六判・並製・二三四頁・本体一八〇〇円＋税　大修館書店）

お酒には漢字漢文や書道に関する蘊蓄が豊富にある。高校生に耳にしたことのあるお酒の銘柄を問うと、「獺祭！」との声が挙がる（飲んでないことを願いたい）。「カワウソ」と「まつり」の組み合わせの意外性が印象的なのだろう。ここで「獺祭魚」の出典を糸口に李商隠の作詩法を紹介すれば、生徒が漢詩を作る際の一助になるだろう。

串田・諸田両氏による約十年ぶりの漢詩対談集が出版された。前作『ゆっくり楽に生きる　漢詩の知恵』（学習研究社、二〇〇四年）の頃は、牛肉のBSE問題やハンバーガーの高級志向などスローライフが見直された時代であった。今回は、個人が好きなものを消費するだけの「おたく」の時代から、誰もが自分だけの知識や情報を自由に公開・発信ができる「評論家」時代に対する提言と言えよう。円熟味を帯びつつある研究者のお二人が漢詩を肴にして、お酒の蘊蓄を「教養」として語り合うところが面白い。

本書は、酒文化研究所発行の雑誌『酒文化』に連載された対談をまとめたものである。忠実な訳・語釈・解説を備えた前作と比べると、高校生の教材というより中高年層向け娯楽書である。本書に取り挙げる詩人の名も「陶潛」「蘇軾」ではなく「陶淵明」「蘇東坡」と日本人に古くから馴染みある呼称を用い、連載時には「白居易」であったものが、本書では「白楽天」に改められている。また、訳も教科書のように模範的なものではなく、リズム感を重視した親しみやすい口語訳に努めてある。

本書の章立てを見ると、第三章は「あこがれの陶淵明」として、陶淵明に関連する詩を取り上げる。たとえば李白「山中にて幽人と対酌す」のような詩の場合、従来の注釈書だと「第三句目は、陶淵明の伝に……とある」程度の解説だけで終わってしまうが、本書は対談のライブ感によって李白が陶淵明を強く意識していたことがより理解できる。また、第四章では月ごとのテーマの漢詩を一首選んで対談する。章題の「漢詩歳時記」は少々堅苦しいタイトルだが、この章を読みながら私の頭の中では「♪一月は正月で酒が飲めるぞ～…」のメロディーが陽気に流れていた。今回書評を書くにあたり、座を構えて読もうしても途中からついお酒に手が伸びてしまった。「卯時の酒」を詠んだ白楽天の境地でなければ午前中から読むべき書ではないかもしれない。教育の現場からすれば、本書は高校生に推薦して学力の即効性を求めるヌーヴォーではなく、授業者がいずれ来たる日の雑談のために甕に封する紹興酒である。

残念ながらこの連載自体は最新号（通算二七四号）をもって終了してしまったが、連載第四十回から最終回までの「酒を介した李白と杜甫のやりとり」がテーマになった六首などは未収録である。近い後日、キープされたボトルが再び棚からおろされるように、続編が出ることを心待ちにしたい。

（有木大輔・筑波大学附属駒場高等学校）

石塚 修 著
『納豆のはなし――文豪も愛した納豆と日本人の暮らし』

（四六版・並製・二三四頁・本体一七〇〇円＋税　大修館書店）

日本の伝統食品でありつつも、発酵によって生じる糸引きと臭いから、好悪の差が激しい納豆を題材に、室町から昭和までの各時代の文学作品を読み解いて納豆食文化の真髄に迫ったのが本書である。

文学作品の解読は、とかく難しくなりがちである。しかし、石塚氏の巧みな筆致により、平易な言葉で、日本の食文化に納豆が大きく影響していることが多くの文学作品から描き出される。

納豆に興味のある読者は、多くの文学作品に納豆が題材として取り上げられていること、また納豆から道徳や倫理の問題へも斬りこむ視点が呈されていることに驚くであろう。そして、文学に興味を持つ読者ならば、王朝文学、俳諧、随筆、川柳で取り上げられた納豆から、当時の食文化や社会が理解できることに驚くに違いない。

その構成は、四つのセクションからなり、計三二のトピックが収められている。そして、各セクションの終わりには、コラム「はしやすめ」が配されている。このコラムの分量は少ないが、内容は専門的である。

四つのセクションは、古い作品から新しい作品へと時系列に書かれているわけでなく、一つのトピックで話題が完結するので、どこから読んでも構わない。目次を眺めて、興味のあるトピックから読めば良い。どのトピックから読めば良いのか分からなければ、近現代文学の中に描かれる納豆について書かれた第二セクションのトピックを納豆売りの声が響く江戸の朝の風景を想像しながら読むことを勧めたい。いかに納豆が日常生活に浸透し、庶民に愛されていた食べものであったか、知ることができる。

納豆を研究し、そして納豆食文化にも強い興味を持っている評者としては、これまで知らなかった貴重な内容が多く含まれていて読み応えがあった一方で、もっと詳しく教えて欲しいと思うトピックもあった。たとえば、納豆汁から納豆を米飯にかけて食べるという習慣が発生した背景を江戸時代の史料から解釈する部分、そして懐石料理の納豆汁に糸引き納豆が使われていたとする部分である。これらの解釈は食文化史研究でも重要だと思われるので、関連する他の史料も引用して、もう少し詳しく解説して欲しかった。

しかし、これは無茶な注文であることは重々承知している。文学作品を読み解きながら、日本人と納豆との関わりについて紹介するという本書の役割は、このままでも十分に達成されている。納豆が描かれた文学作品とそれを描いた作者の食生活を通して、各時代の食文化の真髄を描き出す著作として、研究者のみならず、一般読者までを含めた幅広い層に永く読み継がれることになるだろう。

まだ埋もれている文学作品や史料がたくさんあるに違いない。それらは石塚氏によって光が当てられる時を待っている。納豆のように粘り強い研究の継続によって、『納豆のはなし』の続編が出されることを期待したい。

（横山智・名古屋大学）